2023 年 5 月 18 日放送

印象に残る症例①

尋常性乾癬を合併した慢性湿疹に対する漢方治療

たなか整形漢方クリニック 院長　**田中　裕之**

私は大阪府貝塚市で整形外科・漢方内科・皮膚科を中心とした一風変わったクリニックを開設しています。元々は普通の整形外科の勤務医だったのですが、漢方を学ぶうちに、整形外科だけでは物足りなくなり、「いろんな症例を漢方で治療してみたい」と思うようになりました。そこで思いきって開業することにしました。

その際「漢方が特に役立ちそうな疾患」を考えてみると「皮膚科疾患」が思い浮かびました。しかしそのためにはまず「現代皮膚科学の知識」が必要であろうと考えて、1 年間皮膚科専門医の元で修行させていただきました。その経験を基に「漢方医としての皮膚科治療」を実践しています。

現在 漢方に関しては全科に対応していますが、その中でも皮膚疾患には特徴があります。それは**「治療目標となる組織が目視できる点」**です。これは内臓疾患や精神疾患のように治療対象が見えないものと異なり、医師側からも患者側からも治療効果が歴然とするため、いい面でもありますが、ごまかしが効かないとも言えます。

今回「印象に残る症例」とのお題をいただき、私なりに「漢方が劇的に効いた症例」を考えると皮膚治療をした症例が思い浮かびました。そこで今回は漢方医からみた皮膚疾患の考え方をお話ししたいと思います。

1回目は「慢性湿疹」に対する治療です。

症例の背景

64歳女性・事務職　157㎝　49㎏　中肉中背

主訴は　**全身の掻痒感を伴う湿疹**　です。

数年前から全身の湿疹が出現し、他院でアトピー性皮膚炎の診断のもと内服と外用ステロイドによる治療を行っていましたが、満足いく治療結果が得られなかったようです。さらに内服ステロイドによる副作用が心配になり、2か月前に自己判断で治療を中止しましたところ、症状がさらに悪化したため **他の治療法**を希望して当院を受診されました。

採血ではLDLコレステロールの軽度上昇を認めましたがその他には明らかな**全身性疾患**を疑わせる所見は認めませんでした。

既往歴についてはネフローゼでの入院歴があります。

初診時所見

特にストレスを感じている様子はありませんでしたが、**痒み**に対してうんざりしているように感じました。皮膚は色白ですが全体に乾燥傾向で、艶がなく粗ぞう感が強い印象でした。皮疹は背部、上下肢が中心で全身に及んでおり、部分的に発赤を伴う乾燥性の皮疹が散発し、**掻把痕**が著明でした。

問診で聴取したのは

・皮疹は年中あるが特に冬場に悪化しやすい

・冷えは特に感じない

・作業や入浴などで体温が上がると痒みが強くなる

・痒みで眠れないこともある

・便秘気味でコロコロ便が多い

舌診：紅舌　乾燥傾向　舌下静脈の拡張あり　白膩苔軽度

腹診：右下腹部の圧痛あり

脈診：沈脈

以上の所見から診断してみます。

漢方的に考えると皮膚の状態は「血虚が強く乾燥と炎症が混じった状態」でした。掻痒感がかなり強く、発赤を伴っていることから「**熱邪**」の存在が考えられました。便通や舌診・腹診からは「血虚に伴う血瘀も併存している」印象でした。

この方に治療を行っていきました。まず初回処方として

温清飲7.5g毎食前＋通導散2.5g便秘時頓服　＋エピナスチン1T夕

これに外用ステロイド併用で治療を開始しました。

1週間後再診時、「掻痒感は半分以下になった。皮膚も今までにないくらいきれいになった」とのことで非常に早く効果が出て喜ばれていました。その後も漢方を調整しながら治療を継続していました。

ところがある時「先生、全体的な痒みはなくなって絶好調なんやけど、踵の皮膚が分厚いところだけ痒みが残っているんです。」といわれました。診察してみると厚い鱗屑を伴う皮疹を認め、尋常性乾癬と考えられました。同部には**マキサカルシトール外用**を開始したところ数か月かけて改善しました。

この方の皮疹が全て乾癬によるものではないと思いますが、一部は乾癬による皮疹であった可能性があります。私はこの方だけでなく**尋常性乾癬**に対して温清飲が有効であった症例を何例も経験しています。

今症例における治療のポイントは、温清飲だけではなく通導散を併用している点にあります。この患者さんの場合、罹病期間が数年と長いわりに症状が急速に改善しました。これだけの即効性は温清飲だけの効果とは考えにくいです。そこで注目したいのが「便秘」です。排便は不要物排出経路と考えられますが、便秘があると「出口が詰まる」ことで老廃物を排出できなくなり病状の改善を妨げます。この「詰まり」に対して通導散を使用しています。通導散は名前の通り「通じて導く方剤」です。皮膚疾患以外でも便秘を改善することで全身の巡りをよくすることができる非常に便利な方剤です。

次に今回の皮膚症状の改善に主として役立ったと考えられる温清飲について解説したいと思います。本剤は「万病回春」が原典であり**黄連解毒湯**と*四物湯*を合方した方剤です。**黄連解毒湯**は「熱を冷やす効果が非常に強い清熱剤」であり**四物湯**は「血を補う補血剤」です。この 2 つを合わせることで「**血を補って潤いをあたえながら熱を冷ます**」効果が期待できます。

掻痒感は漢方的には「**風邪**」の影響と考えられています。その中でも特に発赤を伴う強**い掻痒感**は「**風熱邪**」によると考えられます。今例のような場合「風邪」に対する生薬だけでは痒みを抑えられないことが多いです。

例えば**当帰飲子**は「慢性湿疹」を適応病名に持ちます。同剤は乾燥対策として血を補う生薬を含み、さらに「風邪」に対する生薬もたっぷりと配合されています。しかし今回のような症例ではおそらく痒みを抑えることはできません。これは**当帰飲子**が**効かないわけではなく**、当帰飲子では風邪対策はとれていますが熱邪に対する対策がとれていないことによります。「発赤を伴う強い掻痒感」には清熱剤が不可欠です。

しかし、**当帰飲子**が効かない薬というわけではなく、使うタイミングが重要です。温清飲などの清熱作用を持つ方剤で熱症状を治めた後で、残存する乾燥症状に対して使用すれば非常に有用な方剤です。全身の冷えが強い高齢者に対して長期に使用する際などには特にふさわしい方剤となります。

このように漢方治療を行う上では「その時々の状態」に対応する必要があります。ですので「乾燥性湿疹には当帰飲子」というように決まり切った処方では対応できない場面がよくあります。

私が漢方で皮膚治療を始めたころ、同じような患者さんに**黄連解毒湯**を使用したことがあります。その方は最初の１週間で「かなり赤みが引いて楽になった」と喜ばれていましたが、さらに一週間後には「余計にかゆくなった」と仰って治療中止となったことがあります。

当時はこの原因がよくはわからなかったのですが、後になって「黄連解毒湯は冷やして乾燥させる」方剤であることに気づきました。慢性湿疹の患者さんは皮膚のバリア機能が失われているために、ほとんどの場合、乾燥を伴っています。この失敗例の場合、冷やすことで当初は改善しましたが、乾燥を助長させてしまい最終的に悪化したのだと考えられます。この難点を補うために「**血を補う四物湯**」が加えられたのが温清飲です。

今回の症例は慢性湿疹として治療を開始しましたが、のちに尋常性乾癬を合併していることが判明した症例です。病名にこだわることなく「その時の患者さんの病態」を的確にとらえて方剤を選択することが重要です。皮疹を伴う皮膚疾患は目視できるため病状変化が確認しやすく、比較的漢方を導入しやすい病態だと思います。温清飲は「発赤が強めで乾燥傾向を伴う」慢性湿疹や尋常性乾癬に対して非常に有用ですので、一般皮膚科の先生方の診療にもお役立ていただける方剤だと思います。